

## 橋牟礼川遺跡の発見者・折田盛建について

池畠 耕一

令和6年(2024)は橋牟礼川遺跡<sup>1)</sup>が国史跡に指定されてから100年目だった。ここが発見されたのは国指定史跡となる大正13年(1924)をさかのぼること8年の大正5年、発見者は近くの揖宿郡揖宿村東方138番戸に住んでいた旧制志布志中学校の生徒、折田盛建<sup>2)</sup>だった。橋牟礼川遺跡が紹介されるとき、発掘調査を行った濱田耕作ら京都帝国大学などの研究者たちの名は出てくるが、発見者折田の名が出てくることはほとんどない。折田の発見がなければ縄文土器と弥生土器の前後関係が判明するのはもう少し時間がかかったであろう。折田の発見は日本の考古学研究史において重要な意味を持っている。ここではこの重要な発見をするきっかけをつくった折田盛建について紹介したい。

折田は明治31年(1898)1月18日に父西牟田玄淳、母モリの四男五女の長男として生まれた。父は医者であった。9人兄弟の長男だったが、上2人の姉は盛建の誕生以前に離婚していた母親の子で、二人の姉のうち二女は盛建の誕生前に先の母親に引き取られていた。上に3人の姉がいたが、長姉は4歳の時に嫁に行き、実の姉(二女)は14歳の時に嫁に行っている。母モリは明治44年2月27日、盛建が13歳の時に亡くなり、そのあと父親がアイ(義理の母)と再婚している。

盛建は、大正元年(1912)に柳田尋常小学校を卒業すると、旧制志布志中学校(今の鹿児島県立志布志高等学校)へ進学している<sup>3)</sup>。旧制指宿中学校は大正11年の開校で、当時南薩地方には中学校は川辺しかなかった。

志布志中学校へ進んだ盛建は成績優秀だったようで、第4回卒業証書授与式(大正6年3月9日)では優等生(4名が選ばれている)として賞状・賞品を授与されている<sup>4)</sup>。2年・3年・4年と級長を務め、前学年度成績優良により2・4年級には『辞林』を、3年級には『漢和大辞典』を、5年級には『コンサイス、オクスフォード、ディクショナリ』をもらっている。貳方忠雄が中学校時代の同級生河野や親せきの宮内道房から聞き取ったところによると、性格温厚にして努力家だった。文芸にも優れ、健筆であったという。またこよなくバイオリンを愛好し、豊かな才能の持ち主で、いかにも文化人という面持ちの人であった。2年時には皆勤者として紹介され、大正2年・3年の時には寒げいこ皆勤者でもあった。

志布志中学校には『松蔭会報』という校誌があり、折田は4~8号に10編の文章を書いている。4号(1年時)に「昨日の日曜日」、5号(2年時)に「甘譜」、6号(3年時)に「漏れ来る燈火」・「硝子窓から明け行く冬を」・(題不明)、7号(4年時)に「南蛮船の漂着」、8号に「山」・「机」・「涙」・「花」・「矛盾と統一」・「日本歴史から」・「我徒の信念」という文を書いている。5号の「甘譜」では「山川の漁夫前田利右衛門によって唐土から伝わり青木昆陽らが全国に広めた。焼酎・焼芋に供せられている。」と紹介している。5号には7月30日に行われた明治天皇祭での明治天皇教訓歌を詠んでの感想も書いて



図1 折田盛健



図2 折田盛健の生家と橋牟礼川遺跡

いる。7号に書いた「南蛮船の漂着」は元和9年（1623）8月に山川港に来た異国人の話で、7・8歳のころに老婆の昔話として聞いたという。異国人2名と4人の島人が小舟で入ってき、2か月のちに水などを補充して出て行ったという内容である。

当時志布志中学校には瀬之口傳九郎というのちに宮崎県の史蹟主事などを務めた考古学に詳しい指導官がいて、折田はその影響を強く受けたようである。瀬之口は寮の舍監も兼ねていた。折田は大正5年（1916）に橋牟礼川の土手で土器を採集し、それを学校へ持っていた。橋牟礼川は折田の家から約2km南にある狭い川である。丈六の源流地から河口まで数kmほどしかない短い急傾斜な川のため、大雨時などの時には深くえぐられることがあり、当時も遺跡の包含層をえぐっていたようで、折田の採集遺物の中には縄文土器と弥生土器（今は古墳時代の土師器とされている）が含まれていた。折田の採集した地点がどこかははっきりせず、のちに山崎五十磨は調査地点を探るのに苦労したと書いている<sup>6)</sup>。

大正6年6月に京都帝国大学の喜田貞吉は大分・宮崎・鹿児島3県の調査に出かけ、志布志中学校で折田の採集した土器を見せてもらい、縄文土器と弥生土器が同じところで採集されたことに疑問を持つ。折田はすでに卒業しており、喜田に詳しく出土状況は説明できなかったのであろう。喜田は橋牟礼川遺跡の調査を当時鹿児島県の考古学調査を積極的に進めていた山崎五十磨に依頼する。山崎は同年9月に指宿に出かけ、調査を行う。その結果を翌年7月発行の考古学雑誌に発表し、全国の研究者が縄文土器と弥生土器が混在して出土している遺跡であることを知ることとなる。これをきっかけとして喜田や濱田耕作などが指宿におとずれ、大正8年4月には濱田らの発掘調査が行われた。

折田は大正6年3月に旧制志布志中学校を卒業した後、親のあとを継ぐつもりだったのか4月には長崎医学専門学校（現在の長崎大学医学部）へ進学している。その頃の状況ははっきりしないが、大正10年3月には折田家と養子縁組をし、同年4月4日に折田家の三女ユミとの婚姻届けを出している。そして翌11年2月12日に24歳の若さで亡くなった<sup>6)</sup>。彼の発見した橋牟礼川遺跡が国史跡に指定される2年前のことだった。

折田が学生時代にどのような研究活動をしていたかははっきりしないが、著名な民俗学者柳田國男は折



図3 折田家の墓と墓誌

田の死後の大正13年に刊行された『学術の日本』第1篇の「日本民俗学」で次のように記して彼の死を悼んでいる。「『郷土研究』<sup>7)</sup>に寄稿した読者の中には熱心なる地方の学徒が少なくなかった。常陸の(中略)薩摩の西牟田盛建などで、その中には有為の材を抱きながら若くして逝いた者もあった。」と。若くして逝いた者とは折田のことであろう。

折田盛建は現在、指宿市西方にある折田家の共同墓に葬られている。指宿市の市内巡回バス（イッシーバス）の大門口バス停近くの小高い丘である。

## 註

- 1) 最初国指定となった時の名称は「指宿橋牟礼川遺物包含地」だったが、のち追加指定された時に「指宿橋牟礼川遺跡」になったという。現在は橋牟礼川遺跡と呼ばれることが多いのでここでは橋牟礼川遺跡と呼ぶことにする。  
下山覚 2005「橋牟礼川遺跡」『新日本考古学小辞典』ニュー・サイエンス社
- 2) 当時は西牟田姓であった。大正7年の山崎報文では「西牟田某」が発見となっているが、昭和60年刊行の『指宿市誌』では盛建の名が付されている。 河野治雄 1985「先史時代」『指宿市誌』
- 3) 明治27年には県立中学校は川内・加治木・川辺・第二鹿児島・志布志の5校だった。大正11年に県立指宿中学校が開校した。
- 4) 鹿児島懸立志布志中学校松蔭会 1916『松蔭会報』第8号  
大正5年度には松蔭会役員の学芸部委員に任命されている（ほかの年度は不明）。
- 5) 山崎五十麿 1918「アイヌ式・弥生式及石器等を包含する遺跡」『考古学雑誌』第8巻第7号
- 6) 長崎医專『研瑠会雑誌』156号「訃音」の欄には「西牟田盛建氏2月12日午後11時死去セラル」とある。
- 7) 柳田国男は先の論文で、『郷土研究』は大正2年3月に高木敏雄と柳田が共同して創刊し、大正6年4月に休刊となつた。最初は高木が編集していたが、2巻2号からは柳田が一人で編集したと記している。

## 参考文献

鹿児島懸立志布志中学校松蔭会 1913年4月～1918年12月『松蔭会報』第4号～9号

本稿のもとになった資料は以前、「時遊館 COCCO はしむれ」に勤務されていた下山覚氏、中摩浩太郎氏、渡部徹也氏、鎌田洋昭氏たちが収集されたものである。その時、元指宿市教育長だった貳方忠雄氏に多くの資料を提供してもらっている。最後になったが、記して厚くお礼申し上げたい。